

シンガポールを訪れて

小澤 誉子

クトもあつたようだが、今は一種の落ち着きを持ち、それぞれの人種が生き生きと活動しているようである。

初夏の日ざしが街を包み始めた頃。私は雑誌の仕事でシンガポールを訪れた。昔から、海運の重要な拠点として発達したこの地は、今もなお、イギリス植民地時代の名ごりをとどめながらも、中国・マレー文化の色彩を放ち、新しい都市の様相を示している。

街のいたる所に、古さと新しさ、西洋と東洋の渾然としたありさまを見ることができる。そこに住む人々も、また様々であり、中國、マレー、インド、アラブを中心とした人種形成である。かつては、人種間のコンフリ

人種の多さに比例して、また言語の数も多い。そのため、人種間のコミュニケーション及びシンガポールの国際化のために、共通語として英語が用いられている。学校でも英語を勉強させられる。日本も英語は第二外国語として、義務教育及び学校で少なくとも六年間は学ぶことになっているが、日常生活との関連性の薄さから、それだけで十分通じさせることは困難である。しかし、シンガポールでは、即、生活に結びつく。資源を全く持たないシンガポールにとって、貿易という品物を流通させることができ、生きる手段であり、そのために英語は、欠くことのできない生きる手だてである。そんな国シンガポール。

私は、四年ぶりに、今はシンガポールに住

んでいる友人を訪れた。友人は中国系であり、彼女の夫は、オーストラリア人である。

現在友人は、彼女の母と娘、合わせて四人家族。娘ニッキーに、私が初めて会ったのは、

彼女がようやくヨコヨチ歩きを始めた頃だった。五歳になったニッキーは、女の子らしさが増し、父親ゆずりの白い肌と深い瞳。そして母親ゆずりの黒い髪を持つかわいらしい少女となっていた。

ニッキーは、家でおばあちゃんとすごすことが多いためか、英語より北京語がよくわかった。父親のテリーにしては、そこが少々淋しいところだろうが、学校に通い出せば、英語を話さなくてはいけなくなる。

「それまで、待つさ」と、テリーはいう。

「北京語と英語をしつかりマスターすれば、きっと将来役に立つと思うの」

と、友人サンディーはいう。

国際的な街、シンガポール。街にはさまざまの肌の人々が行きかう。子どもの頃から、何の異和感もなく、さまざまな文化を受け入れる基礎が自然とでき上がることだろう。

「でも、シンガポールには大学がひとつしかないから、入学するのはとても大変。子どもは勉強のしすぎて、みんなメガネかけてるなんて冗談も出るくらいよ。子どもの数も、せいぜい二人ぐらいだから、親は、大変教育熱心なの」

のんびりとした赤道の国シンガポール。緑の多い街で遊ぶことなく机にむかうのは、なんとも、もつたない気がしてくる。